

熊取町立熊取図書館

開館30周年記念冊子

NO LIBRARY, NO LIFE



あなたと図書館の30周年

30TH
ANNIVERSARY

目 次

はじめに

メッセージツリー

p.1～2

図書館協議会委員からのメッセージ

p.3～10

ひろがる図書館の輪

p.11

開館30周年記念事業

p.12～26

その他のイベント・展示

p.27～31

新たな取り組み

p.32

町広報で特集

p.33

沿革

p.34～39

住民と ともに育つ図書館 ようやく30年

熊取図書館を設計した 鬼頭 梓 氏は、平成3年開催の住民向けの『建設懇談会』の中で、『図書館は図書館を建てたら図書館になるのではなく50年、100年かけてその地域の人が育ててその土地の図書館になっていくのです』と語られました。熊取図書館は、その理念のもと、図書館建設中から現在まで住民の方とともに図書館づくりを行ってきました。

開館して30年、今ではともに開館記念イベントを行うまでに関係性が深まりました。これからも住民の方とのつながりを大切に、熊取らしさを失わず、時代に合わせた図書館づくりをしていきます。

図書館は、本を借りることはもちろん、新聞や雑誌を読んだり、調べ物や学習をしたり、イベントに参加したり、人と交流したり…さまざまなことができる場です。ぜひ、図書館に足を運んで、あなたのお気に入りの「○○」を見つけてください。

令和7年3月
熊取町立熊取図書館

開館30周年記念メッセージツリー

たくさんのメッセージありがとうございました！





大すきな場所です！
いつもありがとうございます！

！祝30周年！
5歳から11年間、ここで
たくさん本に出会って
きました。これからも読
書を通じて心を豊かにし
ていきます。

本がいっぱいあって
よみやすい

30周年
おめでとう

30周年おめでとう！！
いつも本で元気が出ます！

図書館は
わが町の誇りです

30周年おめでとう
たくさん本
楽しみです

楽しい空間!!
くまの図書館
おめでとう

本の森をさまよう
楽しみをありがとう

ほんだいすき

私にとって
ありがたい場所...

豊かな環境で本が
読めて幸せです。
ありがとう。

としよかん
だいすき

みんながたのしくて
くれてありがとう

これからも
この図書館が
ありますように

たくさん本を
借りました。
ありがとう!!

すてきな友人たちと
出逢えました

いつもありがとう
だいすきだよ
いっしょにあそぼう

初めてきました。
広くてきれいな
図書館ですね!!

図書館は私の人生にとって
なくてはならないもの！

ステキな絵のお祝いメッセージなども
たくさんありました☆

※実際のツリーは18ページに掲載しています。

図書館協議会委員からのメッセージ

くまとり読書友の会

森本 眞知代様より

図書館が常に生活の一部にある私（私たち）にとってこの30年には感慨深いものがあります。

盛んに「協働」を叫ばれる時期がありましたが、それ以前のこの「図書館づくり」こそ、行政と住民との先進的な協働事業であったのではと思っています。この図書館づくりこそが原点であり、図書館運営の上でも変わることなく続けられてきました。

職員の方々はこれまで住民との信頼を地道に築いてこられました。本を通して、乳幼児から高齢者そして体の不自由な方たちへと、住民サービスも社会状況に応じた進化を続けています。

このサービス全体が全国的にも高い評価を受けていることは、職員の方々と共に私たち住民の誇りでもあります。

30周年のイベントに参加する住民団体の多いことに驚きましたが、これも図書館主催の「ひろがる図書館の輪」の効果でしょう。

皆さんが共に私たちの貴重な財産である図書館をこれからも40周年、50周年に向けて支え見守っていかれることを願っております。

図書館サービスの基本を踏まえつつ、進化を続けている熊取図書館の30周年に心からのお祝いを申し上げます。

熊取文庫連絡協議会

持田 麻衣様より

熊取図書館開館30周年、おめでとうございます。

10年前、熊取に転居し子どもが生まれ、図書館は子育てをする上でなくてはならないものとなりました。

熊取図書館や学校図書館、本の世界が子どもの居場所のひとつとなり、成長を支えてくれていると感じています。

いつも多くの子どもたちが本にふれられる環境や機会を整えていただきありがとうございます。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

出口 儉二様より

「私と熊取町立熊取図書館」

そもそも私が本に興味を持った子どもの頃は、大阪市内も戦後のどさくさの状況で、小学校の図書館と謂っても名ばかりのものでした。また、図書館と謂えば天王寺図書館くらいで、歩いて通える处ではありませんでした。ただ助けに成ったのは、貸本屋と謂うのがあって好きなジャンルの本を“二泊三日”で借り出して兄弟で読み回しをして居りました。

そんな時代も過ぎて社会人と成った時には、私もエンジニアとして専門書を読む事が多かったので殆ど企業内の資料室から借り出して読むか、専門書店で購入して読む事が多かったのです。そんな頃、1994年11月に「熊取町立熊取図書館」が開館したのでした。それで熊取図書館を利用すると成ると、趣味でよんでいた宇宙関連の書籍や旅行のガイドブックをよく借り出しました。

この頃よく耳にしたのが、“熊取図書館は立派な図書館で蔵書が多く施設も一流の立派なものだ”と謂う事でした。それで全国から多くの人が視察に見えられたのを読書コーナーから感じられたものでした。

一方で、私達ボランティアグループが活動していた子育て支援活動では、熊取町内の保育所の空き室を借り受けて「つどいの広場“ぷらっつ”」を官民協働で立上げて開設して居りました。この活動は「社会福祉法」や「児童福祉法」で認められたもので、未就園児とその保護者を対象に利用して貰っていました。ここでは沢山の絵本が必要とされていて、熊取図書館から団体貸し出しとして数百冊単位で貸し出しをさせて貰って居ました。

そんな中、2009年に図書館協議会に対し「今後の図書館の管理運営のあり方」について諮問があり、図書館協議会から図書館長の諮問に依って「これからの熊取町立熊取図書館の管理運営のあり方について」提言が示されました。これを受けて教育委員会定例会において熊取図書館指定管理者制度の導入の是非について「直営による図書館運営を行うことが望ましい」とする方針決定がなされました。

2010年9月には私自身が熊取町立熊取図書館協議会の委員に推挙される事になり現在まで勤めさせて戴いて居ります。この立場から見える熊取町立熊取図書館は、スタッフ及び補助職員の方々が数少ない人数の中で如何に多くの煩雑な作業をこなしているかと謂う事でした。

町の情報拠点と成り、読書環境づくりや読書活動の推進等を住民活動として推進しながら住民と共に育ち育てる図書館を目指している姿でした。

昨年度は「住民団体のネットワークづくりの推進」「新たな連携事業の実施」「住民主催大規模イベントへの参加」「こぐまタイム・かみしばいの会の再開」「2階会議室・ホールの利用範囲の拡大」を重点的な取組みとして「図書館活動報告」に報告されています。

熊取町立熊取図書館は開館前の10年間を掛けて官民が協働で図書館づくりの協議を重ねて完成させたものです。そこには官民の叡智が詰め込まれた傑作が埋め込まれているのです。

公募委員

大野 知子様より

人が「動く」本が「動く」図書館であってほしいと願ってきた熊取図書館。
さまざまな団体が図書館を拠点に活動され、多くの本を手に行っている人たちの姿
を目にするたびに、「動く」図書館だと実感します。

開館して30年。まさに「成熟期」を迎えた熊取図書館が一步步、さらに歴史を刻んでいくことを願っています。30周年、おめでとうございます。

公募委員

横尾 香奈様より

開館30周年、誠におめでとうございます！

30年という長きにわたり、地域の皆様に愛され、知識と文化の発信地として
貢献されてきた図書館の歴史に、心から敬意を表します。

これからも、時代の変化に合わせて、新たなサービスやイベントに挑戦し、
地域の皆様にとって、なくてはならない存在であり続けてください。

図書館の益々のご発展と、地域の皆様の笑顔あふれる未来を、心よりお祈り
申し上げます。

大阪体育大学 教授

前島 悦子様より

熊取町立熊取図書館開館30周年、誠におめでとうございます。

貴図書館が長年に渡り、多くの方々に知識と学びの場を提供し、地域の文化と
交流を支えてこられたことに心から敬意を表します。

これからも更なる発展と、多くの方に愛される図書館であり続けることをお祈り
申し上げます。

熊取町立熊取北中学校長

齊藤 貴英様より

図書館30周年を記念しまして、長田 弘さんの詩をお祝いとしてお送りします。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。
書かれた文字だけが本ではない。
日の光、星の瞬き、鳥の声、
川の音だって、本なのだ。
ブナの林の静けさも、
ハナミズミの白い花々も、
おおきな孤独なケヤキの木も、本だ。
本でないものはない。
世界というのは開かれた本で、
その本は見えない言葉で書かれている。
ウルムチ、メッシナ、トンブクトウ、
地図のうえの一点でしかない
遙かな国々の遙かな街々も、本だ。
そこに住む人びとの本が、街だ。
自由な雑踏が、本だ。
夜の窓の明かりの一つ一つが、本だ。
シカゴの先物市場の数字も、本だ。
ネフド砂漠の砂あらしも、本だ。
マヤの雨の神の閉じた二つの眼も、本だ。
人生という本を、人は胸に抱いている。
一個の人間は一冊の本なのだ。
記憶をなくした老人の表情も、本だ。
草原、雲、そして風。
黙って死んでゆくガゼルもヌーも、本だ。
権威をもたない尊厳が、すべてだ。
200億光年のなかの小さな星。
どんなことでもない。生きるとは、
考えることができるということだ。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

『世界は一冊の本』長田 弘/著 晶文社

図書館開館30周年おめでとうございます。

今後も50年、100年と読書文化の発展に貢献してくださることを祈念いたしまして
お祝いの挨拶とさせていただきます。

桃山学院大学 非常勤講師

名尾 利香様より

開館30周年、誠におめでとうございます。

人であれば30歳。多様な生き方を選択できる社会が目指されている今、30歳がどのような時期であるのかを決め、当てはめることはできませんが、熊取図書館は誕生の頃と変わらず『住民とともに（住民参加）』の姿勢を貫き、住民から愛され育てられてきた人だと言えるのではないのでしょうか。

図書館も社会の変化にあわせて運営や取り組みの見直しや選択を求められ、何を選ぶかは自治体・地域によって異なります。例えば、図書館運営を指定管理とした場合、メリット以外に職員の入れ替わりが頻繁となることもあり、その場合は利用者との関係性や声の反映を深めることに難しさが生じます。熊取図書館は、直営による運営をおこなうことで、利用者・住民と職員が安定してつながることを可能としています。また、感染症対策や窓口の混雑緩和、貸出手続きの効率化などをメリットと考え、セルフ貸出機の導入が各地で増えています。熊取図書館も1台導入をしていますが、これまで同様にカウンターでの手続きを事務的なものとはせず、利用者の声を聴き、利用者に必要な情報を提供し、つながりを築いていくための“大切なコミュニケーション”として意識し取り組んでいます。この意識の取り組みの積み重ねが、図書館側からの一方的な発信だけではなく、住民の方々からも要望や企画の提案などを発信していただける“ともにある”関係を生み出しているのでしょう。熊取図書館は、子どもに向けた取り組みにも力を入れており、子どもの読書活動優秀実践図書館として文部科学大臣表彰（平成15年度、平成29年度）を受賞しています。未来を担う子どもたちにとっても図書館が人生の素敵なパートナーの1つとなることを願います。

熊取図書館を設計した鬼頭氏が語られた『地域の人が育ててその土地の図書館になっていく』期間としての100年にはまだ70年あります。これからも住民の方々とともに歩み、個人の間、人と人や地域のつながる場・役割として、ますますのご発展を心よりお祈りいたします。

元東近江市立図書館長

巽 照子様より

熊取町立図書館30周年おめでとうございます。

府下ではじめての町立図書館として大型施設で誕生し、当初から注目を集めてきました。

子育て支援に力を入れつつ、「子どもの本」「YA」「健康」「旅」「スキルアップ」などのコーナーを設け、町民に寄り添ったサービスをしています。また季節や時事に合わせた本の展示もしています。

図書館の多種多様な本を中心とする世界が人に作用し、豊かさを生み出していきます。

図書館として自治を支えるという視点をもった取り組みとともに、地元にある素材を活用してまちづくりひとづくりに役立つ取り組みを行ない、本との出会い、やさしい空間づくりをしてきました。

子どもたちが健康で、生きいきと育つためには、わたしたちは何をしなければいけないか。読書だけではなく、子どもの文化・育ち・地方自治という広い視野でネットワークを組んで図書館活動していきましょう。

図書館はその情報の発信地として、人と人をつなぐ、あるいは結ぶ役割もやっていく必要があります。

厳しい時代だからこそ、今なにが大切かを、見忘れないようにしなければいけません。同時にまた変わってはならないもの、大事にしなければならないものもあります。

「ほんもののまちづくりとは何か、本物の行政とは何か、ほんものの図書館づくりとは何か」これからも一緒に考えながら歩いていきましょう。

テーブルの上に小さな野の花を一輪飾ることで、みんなの心も優しくなります。本も、机も椅子も書棚も持っている命を吹き返してきます。

町民の力とともにいっしょにつくる空間。これからも大切にしていってほしいと思っています。

山本 健慈様より

「賢く縮む」歴史の創造を担う主権者形成への期待

・・・・・・・・・・熊取町図書館30周年に寄せて

冒頭から恐縮であるが、熊取図書館10年目をまとめた協議会『答申』の公表の際によせた拙稿（2006年5月）の一部を再掲させていただく。

私の熊取図書館との出会いは、「広報くまどり」で「図書館建設懇談会」の開催を知り参加したことです（91年1月25日）。この時、設計者の鬼頭梓氏は「私の図書館建築作法」というテーマで講演を行い、住民からの質問、要望に耳を傾けられました。私は、鬼頭氏の講演に感動し、住民の意見、要望に誠実に応えられる姿にまた感動し、そうした設計者と住民の直接的対話＜専門家・非専門家による図書館づくり学習＞をプロデュースした熊取町行政の姿勢に感動したのです。私は住民として、「いいまちに住んだ」と心底思ったのです。また社会教育の研究者としては、「熊取町はなかなか洗練された手法で行政をすすめている」と思いました。

と同時に、鬼頭氏が、講演最後に、ヨーロッパの建築物が何百年に渡って使われていることを例にとり「いくら専門家であっても満点のものは造れない。」「その（満点ではない）建物がヨーロッパでは市民の誇りになっており、市民に愛されている」「どうしたら（熊取の）みんなに愛される建物が造れるだろうか」「皆さんが育ててもいいと思われるものを造りたい」という謙虚で誠実な話を聞き、「いいまちに住んだ」では済まされない、この図書館を育てる使命は、私を含む熊取町民に託されたのだと身が引きしまる思いでした。

だからこの時参加者に渡された「感想等をお願いします」という葉書に、「鬼頭氏の設計者としての思想の奥深さ、謙虚な姿勢も感銘深く、多くの学ぶ点がありました。氏の姿勢をすべての公共施設、教育施設で生かすべきだと思うのです。それにつけても、氏を採用した町の関係者の見識に敬服します」と書いて投函したのです。（『住民参加の図書館づくり』91年3月 熊取町図書館建設準備室）

鬼頭氏がいうように、熊取図書館を育てるのは、熊取町の住民です。協議会で行なわれた議論が、熊取町のあらゆる地域、団体、機関でひろがることを願っております。また議会、理事者の方々は、こうした住民との対話を重ねる中で、熊取図書館を支える政策を決定し推進していただきたいと思っております。

本稿執筆にあたり、改めて鬼頭氏の『住民参加の図書館づくり』掲載の「私の図書館建築作法」を読み直した。氏は、ここで「世界中で日本は非常に特殊な国で。どんどん古いものを壊してどんどん新しいものを作ってしまうんですね。こういう国はほかにないだろうと思います。」「おそらく20年先はもちろんです、10年先でもきちんと予想をすることが出来ないんじゃないか。」「どんどん壊していったならば、これは日本の今の勢いで作り直していくと、日本の問題ではなくて世界的な資源の枯渇に必ずつながっていくと思います。」とも述べている。

確かに氏が言うようには、10年先、20年先の予測がむづかしい。しかしいま私たちは、ほぼ確実な未来を突き付けられている。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば2100年には5千万人を割り込むまで減少する。この2、3年の予測をはるかに超える出生数の減少を勘案すれば、さらにそれを下回ることになるであろう。

人生100年時代、いまのこどもたちが、2100年に見る風景はどのようなものであるか。

かつて日本創成会議『増田レポート』が「消滅可能性自治体」の可能性に言及し、政令指定都市や中核市を想定した「地域拠点都市」への選択と集中を誘導した際、当時全国知事会会長でもあった山田啓二・京都府知事は、「京都の日本海側、北部は、放棄するのか、シカやイノシシにゆだねるのか」（「持続的な成長への挑戦 一極集中の是正と関西が持つ強みの発揮」をテーマにした関西財界セミナー・主催・関西経済同友会、関西経済連合会2015年2月）と手厳しく批判した。いま福島原発事故のあと「被曝の森」といわれる地域で水田や畑が草原や林となり、イノシシやアライグマ、キツネなどの野生動物が闊歩（かっぽ）する風景、これが今のこどもたちが2100年に見る地域ではないか。

このような未来を意識しながら、いま日本ではあらゆる社会組織の再編がすすんでいる。自治体の広域化再編、図書館等を含む公共施設の統合集中化、小中学校の統合、そして公立高校の統合廃止、そしていまやそれは大学にも及ぶ。2100年にむけて地域存続に必須な公共財を、鬼頭氏がいうように「どんどん壊し」ていっている。

では私たちは、この事態にどう立ち向かうべきか。「賢く縮む」道をどう創造するかということではなかろうか。しかし昨今の内外の選挙事情をみればわかるように、賢い主権者形成は、きわめてむづかしい。

2019年答申「これからの熊取町立熊取図書館の管理運営のあり方について（2009年提言）」の検証について）」を公表するにあたって、私は以下のように書いている。

近年SNSなど情報手段の発達、大量で多様な情報の入手を可能としたが、顔の見えない情報は、いわゆるフェイクニュースで誤った方向に誘導し、他方自己の関心のある情報によって狭い世界に閉じ込められ、多様・多彩な他者と分断され、共生を困難とする傾向を生み出している。

続けて、図書館への希望を以下のように託した。

他方、図書館には、大量の情報・資料の集積があるが、それはまさに多様多彩、相対立する情報は集積され、それを一覧できる場である。そして、そこは、顔の見える関係を築くことのできる場でもある。賑わっていても、人と人との関係を生み出さない個の集合では、地域は生まれない。

「賢く縮む」ためには、人々が地域の図書館、地域の学校、地域の大学に集い、交流し、自分と他者の幸せを語り合い、自他が幸せになるシステムを考え合う賢い主権者となっていくことが必須だと思う。熊取図書館には、この希望を託したい。

さて2100年にほぼ私の歳となる孫は、30年後、そして2100年にこの一文をどう読むのか。